

佐賀空襲恐ろしい一夜の記憶

戦時中、県内で多大な被害が出た空襲の一つ「佐賀空襲」は1945年（昭和二十年八月五日）当時、私くし佐賀郡久保田村大字久富、思斉国民学校五年生十一歳、服は上下「国防色」兵隊さんの服の色と同じだった事記憶しています。八月五日家族で夕飯を済ませ、父は部落の人が戦死去れて其の夜お悔やみに出かけて行き、内地でも昼夜かまわず米軍の飛行機が迫り空襲警報のサイレンに怯えていました、夜は電気の明かりが外に漏れないように黒い布で電球の回りを囲ってありました、皆んな子供達は早めに寝床に入り何時位過ぎたか夜十一時頃、近所の叔父さんがラジオを聞いて貫高い声でB29爆撃機が600機有明海上空をこちらに向かって飛行している危ないから家から早く逃げなさいと知らせに来た、家族皆んな眠気眼で飛び起きたころ、父も急いで家に戻り叔父さんが知らせた通り大空襲になるぞ母と姉兄弟と上布団を頭からかぶり裏口かお寺の細道を通って水田の側に来たころ東の空は爆撃をうけどんどん音と共に真っ赤に染まり、水田の細道は逃げる人でいっぱい皆んな口々に、念仏をとなえ生き地獄みたいでした東の空は瞬く間に炎の海、夜の火は近くに見え私達の非難してる細道までが明るく照らし出され、その時農家の叔父さんが馬を引いて逃げて来て、ここも危ないから小川の堀に逃げなさいと大声で叫びましたので先ず側

の水田に皆んな思い思いに泥まみれになり田んぼの中は人々で念仏の声だけが響き渡り何時の間にか一人小川の堀に浮き草が一杯の中に無我夢中で飛び込み堀の岸のこも草につかまり、首まで水に浸かりやっと我にかえると両側何方にも顔、顔、皆んなここでも念仏を唱えていた、深夜何時か分からないが空襲は続いていた、ふと空を見たら花火の様なきらきら色とりどり火の粉が落ちてきたのがきれいでした、それが爆撃機から最初に投下した照明火弾それから焼夷弾が投下され私達が非難してる小川に浸かっている近くの民家が真っ赤に炎焼に包まれて来ました、前半は佐賀市の空爆が激しかった何時のまにか久保田久富が狙われ空爆され私達の非難している小川から100メートルの民家が軒並んでいる所に焼夷弾が投下され、あっと言う間に火の海となり目の前で家の壁、中の方が火が回り壁が焼け倒れ、屋根が焼け崩れるのを小川の中、首まで水に浸かり焼け落ち燃えていくのを見つめて怖くて声もせず息を呑みこんで耐えていました、夜が白々明けて来た頃私の名前を呼ぶ父の声が聞こえ深夜、小川の水の中で一晩過ごし濡れた体ではい上がり父に飛びつき泣いて抱きつきました、私の頭は油見たいのが髪に付いていました、私達の非難していた場所の直ぐ側に六角形の細長い焼夷弾が何本も抜かり投下されていましたが、よくぞ命があったと父がお前も運がよかったと言いました、それからやっと家族全員無事が確認出来抱き合って喜びました、八月六日朝、実家は焼けないで無事でした、実家から

東側に五、六軒先から、百軒余り後形もなく灰の山に熱々しく白い煙があちらこちらで残り焼け臭い匂いが漂うていました、空爆被害で部落の死亡者1人、怪我人多数出ていました、暑い夏、八月五日深夜～翌朝六日、同じ日佐賀市の空爆空襲の被害、死亡者61人、家屋443軒が焼失したことも後で知りました、佐賀南部空襲空爆、同じ夜久保田久富の空襲被災は1945、昭和二十年八月五日夜から、翌朝六日当時私事、国民学校五年の夏の夜の怖い経験が私の心の中に記憶として残って居ます。空爆のあった朝に、広島県に原爆が投下されラジオで聞き身の置き所が狭く昼は家の座敷の畳をはぎ其の畳で父が四角の櫓を作り、その中に身を寄せ、空襲警報のサイレンがなると急いで外の防空壕に非難して、空襲警報が、解消になれば家に戻り、夕方になれば竹の柱4本と麻蚊帳と敷物毛布等を家族で持ち家から離れた土手に竹の4本柱を立て、蚊帳を吊り一晩住、泊まりの野宿が続き毎日毎日の昼夜の日課で夜になると怖さがこみ上げて少しの音にも怯える日々でした、1945昭和二十年八月九日お昼頃私達は実家にいました、ガラス戸がぴかりと光物凄い音障子がガタガタとゆれたのでびっくりして姉さんと実家の裏口に出て、ずっと遠い南西の空に黒い黒鉛の雲見たいのが広がって行くのが見えあれが、長崎県に原爆が投下されたのでした、原爆爆弾の偉大さ破壊い力がその後知りました、こんな田舎でも空爆が激しく、日本の内地も益々激しくなり、八月十五日お昼、ラジオから突然聞こえて来る「天皇陛下」の

声で戦争は終わり敗戦のお言葉が流れて皆んな悔し涙が止まらなかったのを覚えて
います。毎年、夏八月五日～六日の（佐賀空襲）の記憶が走馬灯のように移
ります。今年67年目の夏を迎え、佐賀空襲を知る人も少なくなって、戦争の悲
惨さを後の世に伝えたく、何時までも平和でありますよう願う気持ちでいっば
いです。現在、神奈川県藤沢市に住む、古賀、七七歳です家族の皆にも語り続け
ていきたいとペンを取りました。